# 繪本豐臣勲功記

四編

六

へ遠13
2209
36

特
へ遠13
2209
36

# 繪本豐臣勲功記四編卷之六

目錄

越前噪動一揆毆冨田倚
屬信長示威
信長上洛使朽家人叙爵
爲再攻越前

秀吉謀陷河野継陽杉浮

屬 諸侯落没

凶徒悉滅令越前貺柴田上

屬 其國改事



# 繪本豊臣勲功記四編巻之六

櫻澤堂山 編輯

## 織信長動一揆殿富田侯屬信長示威

大樹を伐るふへ斧を須ひ。草を苅ふへ鎌用ゐ各〻當惑あり。木下既に計議を設げて。滅并滅倉を滅さんとそれ伐伐する惑の用天然ゆーきくこれを扶く。今又富田孝之。使者たるも一の奇あり。然バ彈正忠信長い江織をさそふ平須しけるど。今將猶も勢力ふ。威を減さんして窄城去ぬる。長浦城の服部左京亮を攻伐爾しと大軍を發され。同年九月廿四日さびしく攻起るといへども。防戦もそれまあ〻ぶれを力く落城せべくも見えず。遂ふ帝帰陣ありてはち同ト十一月上洛まーくそれより直ふ江の州へ發馬し。若江の城に推進

らる。秀吉ちもく舘をとる。更にこれ武官をそむき、遠ふ之好を太天
義昭を自殺なさしむ。是義昭公使ひ敗せし後外ふ歌を作る事もふけをせ之稽古し
く此歳も暮。天正二年の春とへるうぬ。然かるふ越前一國ハ去年朝
倉滅亡已后。木下藤吉郎を奉行し。主君へ機密を言状せ之。則
地柱田猪麿ち丹波れ奉。を守護代として是れ々多。安きに在く危武
忘を驕奢のゝ発起しく。業輝ふ眩ま酒色ふ流く。朝倉の一族つ奉
武まぐ。奴僕の侮く海組び。これふりてその初ハ良文ちし宴も罵り
怪む事多し。中に然く府中の城を富田弥六郎長郷ハ織田ふ対て
忠を論せど。信俊丹波の法名之ふ彷彿ふ。柱田ハいとゝ説客れ切ある武も
て新の如くもふ逆。國中ハ政事を去るふ。頑く不快ふ思ひ
ゝと。信長の命りさひふ通ふ。悔会ふ也ゝ下僕ハ受然るふ近来

信俊が放逸驕奢の挙止武。憤ゝ有る機舎。遠慮ふ有る事出来
れり。その不得いかんと尋るふ富田弥六郎ハ一族。毛谷猪之助。去年九月
信長の御供をして。長浦ふ出戦中。退路の戦ひふ。主顔の援せしめど
も。恩賞の沙汰もなかりしを。富田此事武不快ふ思ひ。遠遠戦切て恩
賞武。まゝし奉ゝ得させんと。柱田りゝく訴々る。信俊岐阜へ参候ふ
却て又しく言状もゝく。富田弥六郎。毛谷猪之助。我意ふ任のゝ
て賞を貪る。不忠の輩ハ不傾を滅し。去るべしとまゝせしゝ。信長こ
れ武所しめし。諸事三奉行と相候して。執料ら為に命せるゝ信俊
これ武傾聞して。武所へ帰りゝ多。悪地眼病ふ悩され。療治諸ゝ武
盲と為る。實に恐しや重恩の。主君ふ背さし天罰ふんぬ。然るふ富田
弥六郎ハ。信俊岐阜へ参上して。信長へ言状せしゝ武。いづくゝうか所

出けん毛谷猪之助を推挙ハるさで。却く俺们ゲ一族を。誘言せ〜こと
禍懐ゐ多。桂田ゲためゐ誘害せ〜れ。徒ゐ多伐損さんより。信濃伐撃て
恨をちらし。就ては一国を横領せんと毛谷悟井を説ハ誘ゐ〜。或ハ御氏傚
を歌隨へ。同年の正月十八日。一柴谷ゐ推進て。三日ゲ陰夜も休まゐ烈
火の像く攻着なれを。桂田信濃防戦諸ゐ終ゐ蒲田に殿をたり。
妻ゐ従類一個も剃さゐ。貪悪く積勢〜いで遠剃ハゐの充ゐる三者
紛伐も撃投屋〜ちく。同じく廿一日ゐ大勢一時ゐ北の庄を攻着たり。
織田家の奉紛明智十兵湯。林下助右衛門。津田九郎次郎。光秀て遠
振を波阜城へ注伸せ〜ゑ。織田殿所〜めされ。然こそあらめと笑を
せゐひ。三者紛に〜事伐ちのまぐ。迷ゐ退去ゐ毛紀よ〜。命屬られゐ
ふり。三人退去の准備をゐひかどを漢ちで一揆蜂一万餘人推進

て稲麻成長の像くゐ囲む。遠城中ゐハ。兵士僅ゐ百餘人籠る大敵
を拒抗ゐ。准備もゐ〜を食悪く。驚怖ちく〜ゐ。光秀一
汁伐二菜ゐ〜。明智泳平次光春をりく。敵の陣中へ使節ゐさ〜め。
富田毛谷倫ゐ対面〜く。東〜出ゐる言語ハ各容意ゐるゐりて。桂
田信濃を殿ゐ事。武門のゐ〜ひ咎むる條ゐ〜。然ゐ遠城を提相。
俺们を殿んとせ〜ゐ〜ハ甚伐て其意を得び。事ゐ発を考ゐゐ各こく
も。素ゐり別振の怨もゐ〜。當城ハ是紛〜ゐ〜こく従兵僅ゐ百伐足
らぐ。防戦も屋紀方術もゐ〜。各桂田を殿たる有伐頭余ゐ告知
され。三奉紛退去ゐ毛」と命就るゐ〜めゐ〜毛。美義ゐ〜退さ帰る
ゐり。原来當國ハ〜ゐ都ゐく。毛谷余代〜の回領にして。各出生の産地ゐ
多べ。信長他人を交ハゐ〜で。毛谷一家の猪士ゐ〜ゐ。一国の地を分与く

桂田信俊
盲聲と称して
増田毛谷
等を
誅せらる

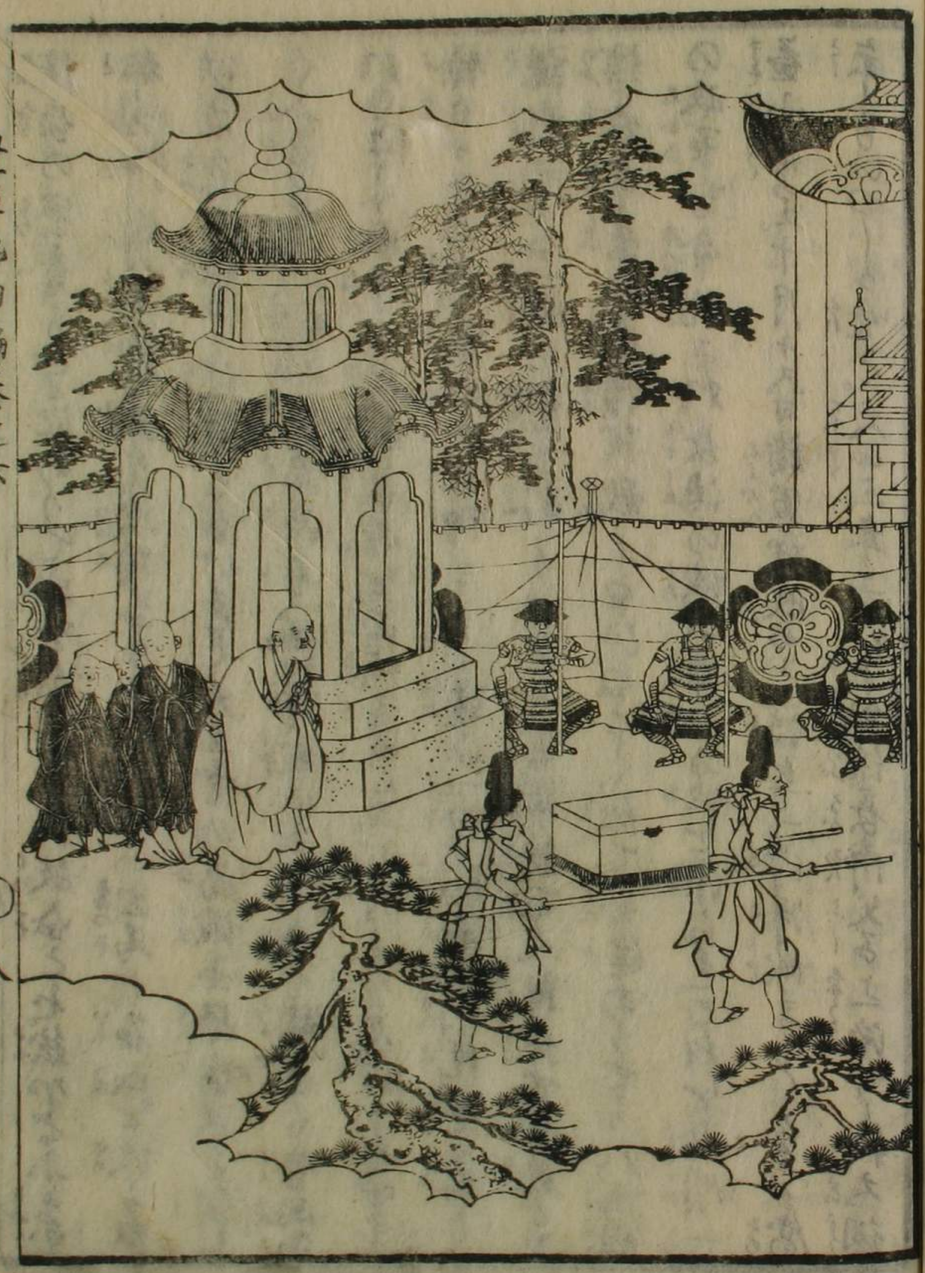
僅三人の俺們よ。五百の兵士ばかりのこ。それさへ義京の代ふ立てる。政道舊例を革めざるべ。舊の人なりく四地をば平張あさ〜む深慮にく。就ふ六ざらべ紹金家の。人このよく國ばかりの氏を慈育ゑまざ〜んば。信長まふたち當人ふ國ばかり陽るるおが〜めゆ名織田ふ家の武士をさ〜意れば。桂田を借ふ統させろう。然る後信俊放奢はしく。政道整〜ろざるのろ。盲目れ分とありつまを。遠日守護代を華むあく頭く内意のありうしば。ちで謀勅せろうも是桂田ふ罪あれであり。然る後今又俺們まざ。攻敵ゆひまを。信長何とく捨ってさ。攻進らまんるゆ必定あり。義京ばかりを防ぎ得びいふ各勇猛にもせよ。織田ふ敬して條得べいろば。俺們岐阜へ立籠り。遠遺桂田の殿れしろば。きふ言狀いろ〜ふを。貴ハあるとも時ハふうろん。遺恨ゑ紀俺們

を。攻殺して大將の門怒ば出し。自滅を招ざゆろんろう。武ふ第一國の主とありく。織田の旗下に居しゆろ。ばば兵万金の計議ふ同らびやいまざ合戦ふ及ぶざるろ。よく〜遠慮ばめざ〜されなと。理のあろうみを抗尽せを家田俊これふ恐ひ。伴議をあ〜く光春ふ。返答しくいひろあり。命誠ろ理解のおもむき最ふ極ふ感ざるあり。俺們即時ふ軍ば收め。各ば車に乗ばうん。然るうハ當國の事。如て俺們ふ任さるべきゆう。信長へよきに推挙しゆ人と。急言て光春ば帰らしめ即時ふ攻路を引ば退き。人質まざ城中ふ送ろ。光秀大ふ歓笑ゆ。彩て八心字〜とく。同城ふ〜てこれを通供。駅卒們一個も損るんで。雑ゆふ攻阜へ帰着ゆ。雑者滋勅の始終を。信長の御前ふ達せ〜ろば。大将孫ふ感悦あり。光秀の智計ば賞せられ。猶捨置て

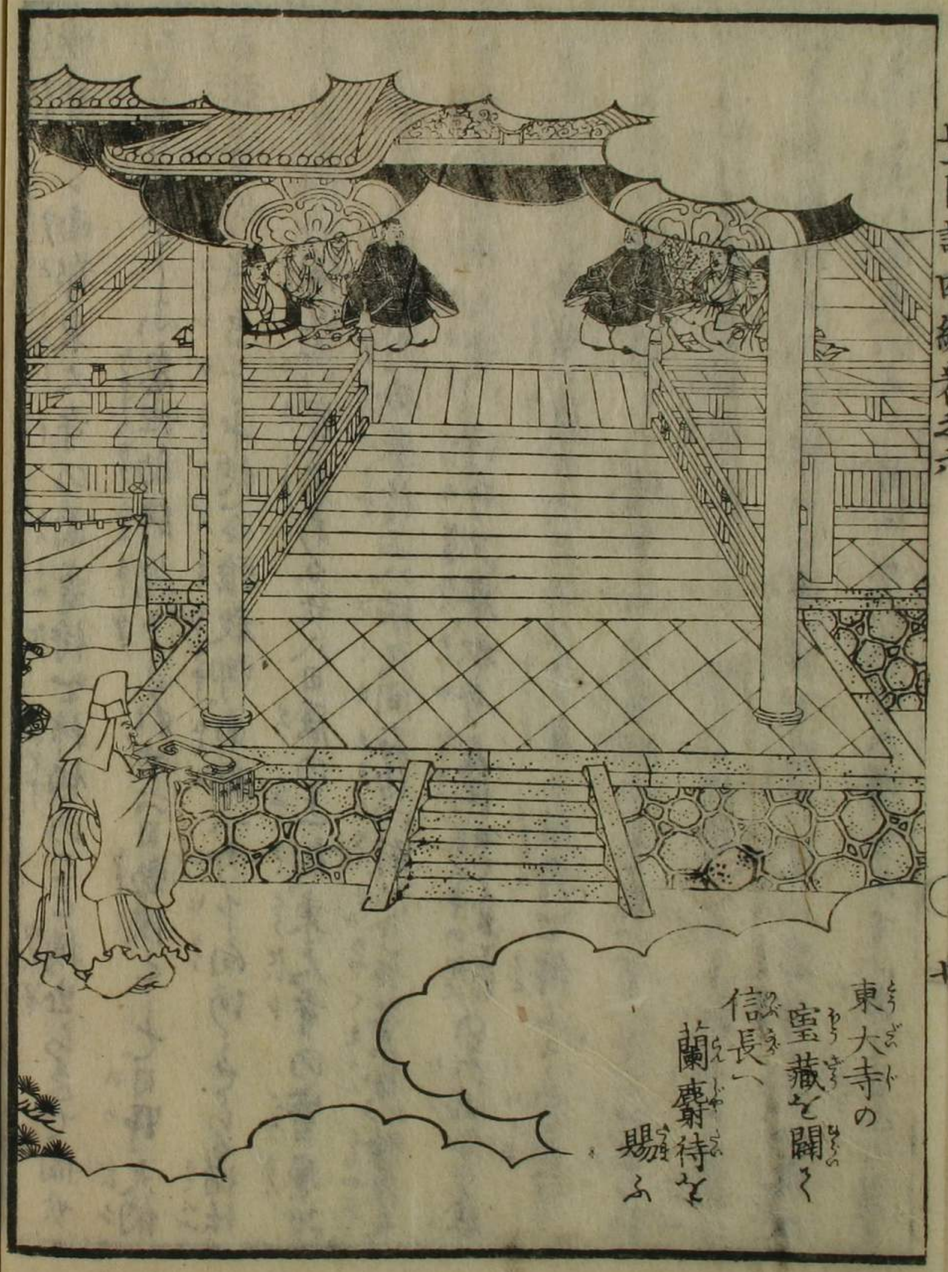
十分ふ同士敵させんと謀らまとる。就中ふハ富田・浦井・毛谷の倫等信長の返答いかゞわらんと待ども効なんの沙汰もなし。備ハ明智倚ふ歎きしう。彩るうへハ織田ふ入魂將依せる。為信依者を攻報さんと使者ハ有りつゝ歎出し。石羽の山中石羽ハ足羽郡ふ属井に在り山ふ居城ふ〜たる。京境又ハ代勢力とあんこれにうて國中に歎對さる軍ふうしうべ。富田像今ハ心の隨ふ敬遠猶奢を行ひ々る。然るに加州就ハ。郡民さべく一向宗ふ。高田寺俗寺・石山本願寺の門徒ふり。戦國のふうひふれを。壮年の軍の武郷を知ぬハなりゞ四方ふ。紀倉家滅亡ハ憤を。その民とゝて看代責。今又就ハを礼改さること思べふ堪ゞと蒙ハ為ハ搖らひ二十五万の一揆ま。長傷。汀倉ハ攻陥し（長傷に八富田与七郎ハ合力ふ八今林勘右衛門ハ毛谷村ハ攻陥したり）序山へ攻着てハ。浦井慈内を殿拵る。その勢威破行れ像く。北の庄ふ乱入ふ。毛谷精之助（三人ハ浦井の後拵之助ハ毛谷の庄ふ住ま）を斬戦〜。遠三ハ逆徒の張本。富田弥六郎を誅代せんと猪奢る一揆ま。偏勢二十五万餘人府中の城ふ振費ふ。四南八面ふ推捉稠く微塵に分さんと楼んゞうしふを。富田弥六郎勇猛ふれども。腹心とゝべき。毛谷・浦井一統ふ滅亡しうゞ。今ハ救助の力も効で。逆徒ゝと合決め。終ふ打費戦死〜〜。亡橋京境（朝倉を滅ま橋と章表ハ）ハを強〜うまこ。これをも斬戦るさでハ四〜〜と勝山ふ推進たしゞ京境いちゝふく。城を逃出平泉寺に奔投ふ。寺中に駐居たりし代一揆ハ逆ふ所出し。寺ふ大代うけ。一向ふ接記るふ。拒抗徒で一山の衆徒。ふこゝ〜彼走〜れを景境も殺代せらまぬ。今ハ就ハふ歎ふ〜とく。汀わの地ふ乱入せん。と本芳廣ふ推進くれた。信長これ代所行。為が伝代さべきふりと本下ゞ方ハ向せ四人秀吉

彼阜に参向し。いまゞ征伐の時色〻。其所謂に一揆なれども。彷彿として
勢威壮なり。将軍心一致して。防ぐにも。戦ふにも。其指揮を
なる。加之多勢にして。容易ふ征伐すゝ。これを拒く。弁色ふ
屋〻。然る間に民家。心奏く守護人俗。と事論を記ぜきに。其時
征伐すゝ。秀吉小谷ふ有るうちに一揆百万記ること。江州へ礼坊に
あらせ給ひ。御心事くお存されと勇〻。然る孫新の間ふ。信長要
途まゝく。其案内さ多ひとるゞ。同六月流布本には二月とあるは誤なり十六日。彼
阜を御発駕ゆ。せ給ひまゞ江州ふ投り給ひて。織田一揆の虚実伝礼
されこれらの事ハ本下に信せ給ひ。亜ふ上洛ぎゝくて。参内を遂ける
に。同十八日勅諚あるて。信長を従三位ふ叙し参議ふ任ぜ給ひ公家
武家位ふ参賀せり。別ヲ遠首尾の次第をゆく。年来密ふ

懇望ある南都東大寺の蘭奢待を拝領のこと預出らるて同廿
二日参内せゝふ。恩地勅許御下され。廿六日勅使として。日野大納
言輝資卿。花山井中納言雅教卿。南都へ御下向ゆらる。備後
長ハ多門の城に御寄宿ある。廿八日辰の上刻。東大寺の宝蔵を
開らせたり。當晩列撿奉行ふハ。佐久間右衛門尉。簗右九右衛門。蜂屋兵
庫頭。塙九郎左衛門。竹井久庵。松井友閑（東大寺の記に用て人名を略）の六個なり。然
るに新係の名香ハ長さ六尺の九重筐ふ綾羅を纏ふく秘蔵たり。
さるゝ。信長一覧して。将軍家の舊例ふまうゝ。一寸八分を切取り。
残る所ハ返納ある。信長これを三ふ頒ち。一残御自分ふ收拾らる。其二
ちゝ医家俗ふ。各分賜らる。遠一陪を伺聴。東西遠邦の大小度或
ハ羨ゝ或ハ怨ゝ。いよく織田家に属せん肇を。かりふ族も多くなる。







東大寺の
堅藏を開く
信長、
蘭麝待を
賜ふ

信長の密意もこゝにありて。威を示さんとの政令とぞ。然るに京都の御謝等勤め畢り。次順ありて大坂に出馬し。石山を攻られけるが急に彼るゝ澆漓もなけれバ。天王寺の附城に。守兵を残しく入置き。佐久間信盛を大將とし其まゝ岐阜へ御帰城ありしが。今ハ諸勢も安閑なれバとて数年の怨敵長嶋を征伐せること。七月より九月まで六十餘日が其の際。遠江に在陣まして。遂に一揆ら石山門徒。衆悉く誅戮せらる。一揆の勢も討れけるも。自軍数百人戦死せり。然ども信長年来の。蓄憤を散じたまひぬらく。頓て安堵あらせられ。當國の政事を命ぜされ。長嶋の城に勢州の地を添られ。これを瀧川一益に賜ふ。十月十五日諸軍を收めて岐阜へ御帰城ましくるが。當年もいつしか暮て。天正三年二月下旬。信長御父子上洛せられ。大相國寺に御帰宿ありし時。兹に今川氏眞ハ先年武田に國を奪れ織内を漂ひ来りしが。遙々信長の上洛を聞き宿望遂んとて思を奉人と縁を求て對面しけるが。青物として百端帆といへる花活に今川家の重宝宗祇遺愛の名器たる千鳥の香爐を進ぜし。（宗祇法師ハ文亀二年七月晦日駿州駿府桃園定輪寺にて令終しは今川氏親の代なり）此香爐こそ天下無双の名器にて古しく寺持あるなれバ。信長なゞなき歓悦せられき。殊に秘蔵ありせらる。然るに氏眞が時より。蹴鞠の技に達せし。其風聞あるなれバ。これを本望ある事なり。三月廿日相國寺において。蹴鞠の事を催せり。遠技に堪能ある諸卿達も。群聚して見物ある。氏眞の蹴鞠の装して。数千の見物に緒もせん。されバその声噪らかに。数刻蹴揚なさるといへども。急緩ある法拍案ぜん。一上半下過つ躰なしに得練磨ハ諸

今川氏直
蹴鞠を巧みて
文武の衆を
驚感
せむ

公卿も陰を熟して感賞せらる。中み武辰の人くハ。情み神威把合て情や影量に武術を練べ新寨くハあるべ紀み。武門の家に生れるべ。兵書に深く武術に拙く。戦国み用ゐる技を堪能せ〜練。絵み続るべ〜みそよ。朝廷み族も多〜。當天の遊場果るべ後甚ハ同月下旬。参内ありて嬉男勅九郎信忠を。従五位下に叙〜岩倉に任せらる。然る所み拙れ〜加勢の御使者到来せ〜ひて。不日に御出馬ゐ〜ゐみく。二州境(表向ある

信長上洛使市家人叙爵 再改我義

中本国ちに繁示義ばくらつども。既みハ既に西みハ河み。然べ信長三州長篠みて合戦み。武田の威勢を拉ぎ。大將欣悦ひぎ〜ゐく。漸進えて凱陣ま〜く。遠国の親戚義門のたり。天正三年六月廿五日。信長波皐を御出

ありて。速ふ上洛ま〜く。相国寺に御宰宿あり。京国の軍場御猪利のむ。偏ふ義風ひ〜ひ。帝も感感鉾ゐ。宜〜く忠賞せらる。〜とく。勅使をくだ〜おかる〜にて。諸卿御評議ま〜くて官位昇進のこと我命せられども。信長ゐ〜く辞退あり。然みぐ〜多年功勇ハ臣家宰。叙爵免許ある。ゆうにと思授さく預ひ〜ゑ。蚤速御免ひるふようて。信長大ふ歓喜せ〜ま。ま〜最頭にハ。木下藤吉郎秀吉を。従五位ふ任ぜさせ。明智十兵衛光秀を日向守に任ぜさせ氏を惟任ふ改む。丹羽ゐ郎左衛門長秀を惟任ふ改氏せられ。塙九郎左衛門長俊を侍中ちに任ぜさせ。氏を原田と改らる。藤田左衛門を佐右近と改名させたりこれらの遠謀ハ頼てより。九州までも欲ゐ〜ん。おが〜ゐ〜ゐく我もゐく。天下一統ひるうハ。遠案を張西の傾至たり

志かん御同意なく。斯の如く命ぜられたり。惟任惟住ハ西戸次の姓字たる古代名にして九州におゐていとも著名なる家なり
領主となりしくして将亦木下秀吉にハ羽柴の氏を賜んぬ。羽柴ハ西田丹羽の緒臣しかれバ縁てかく除く斯の如く
御家人の叙爵の儀式相済て。悉く在京ましまれしうち。西国方
の大小名。おのおの上洛して信長に謁し勤力を通じたりけるが中に
も小寺政職ハ。先年織田家と合縁せしかバ。今度も京都へ参候
ありしに。赤松の家督孫三郎範房村上源氏小寺筑前守の後裔之の代も伴ひ。信長に謁し。
御将信の旨茂言状ハ。其外別所孫右衛門重棟御参候しければ。
信長懇切に詞をかけらる。各これに帰服ありし。感悦して帰国せる。
其後京都の政事等。猪先なく命属られて。御帰国の道すぢ
江州瀬田においてせられし。長橋双方掛禁まじきむね。山里某深ぐ木村
治部丞高重に命ぜられし。同じく七月十七日。岐阜へ御帰城ましまして



茲に北国越前ハ。先年一揆蜂起して今ハ本願寺の兼領となりて領
せしかバ。越州よりある護代を居。国中の政事を執行ひ。姑く静謐な
たるの所に。一揆の輩今ハ又。金銀財宝を奢まで済く己が儘に驕奢
を成しける由国法に随さバ。我意の不為のミ多かりしまた守護
代これを咎れども世一機も制止ひべこそ。募び騒動を催したり。時
来れりと羽柴秀吉。頻りに岐阜へ注進あれバ。信長にも速事を待るゝ
ありし機会なれバ。御悦喜なかなか斜ならずして。速に陣触ましく。同年
八月十三日岐阜の城を進発せらる。まづ先陣の門々ハ。惟任日向守光
秀。柴田修理之進勝家。惟住五郎左衛門長秀。羽柴筑前守秀吉。長
岡兵部大輔藤孝。佐々内蔵助成政。原田備中守長綾。戸次右近政辰。
荒木摂津守村重等。其勢三万六千余騎。次ぎハ信長の御旗本稲葉

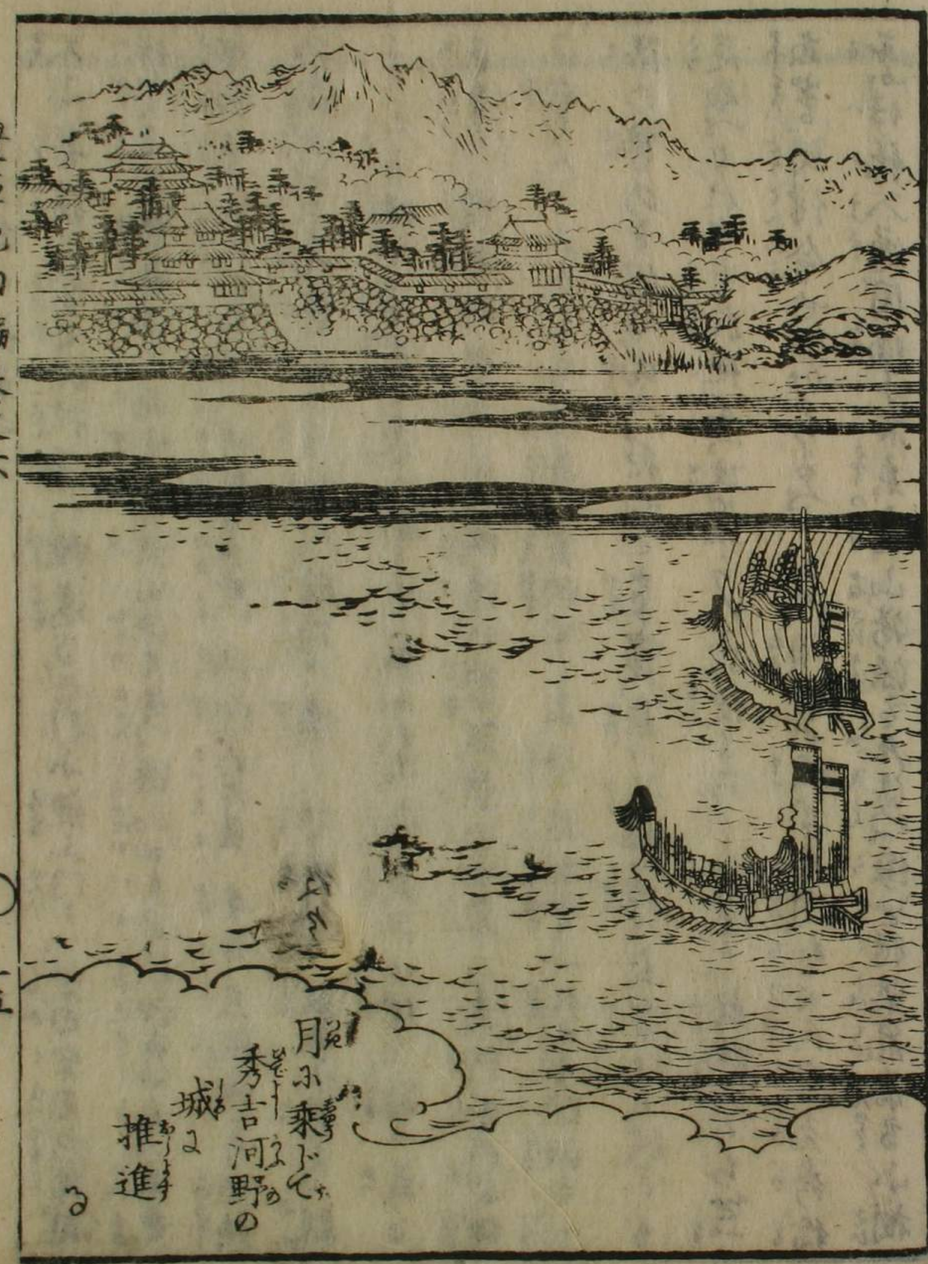
伊勢入道一徹。父子三人。瀧川左近將監一益。池田勝三郎信輝。同播磨守輝政。子勝九郎信之。織田又左衛門利家。蜂屋兵庫頭頼隆。安藤伊賀守守就。不破河内守勝。十万餘騎。渡陣ハ小島信雄。神戸信孝。織田七兵衛信澄。一万餘人。まつさ若狭より来れる。栗屋越中守。熊谷大膳。山形下野守。白井民部丞。松宮玄蕃允。同左馬助。寺井源左衛門。香川右衛門大夫。八千餘騎にて加勢ありしか。其勢都合十二万八千餘騎。中ハ丹波の河内守。一色左兵大夫義定ハ。数百艘の兵船にうち乗。越前小浦へ推進て。諸所方々を放火して。這時越前の守護代。下妻筑後法橋。此よし伝聞て大ハ驚て。郷民等に指揮成る。これを防ぐとそいへども。一揆ハ指揮ハ隨ふて。織田の大軍ハ怨恨して。金山林ハ逃躰る。敵ハわ〳〵と騒動。陣換ハ雑亀なんに。ひろめ勢



ハ拒抗ぶ〳〵とて。虎枝の城ハ凝守たる。下妻和泉守久茂の惣見寺。宇坂の本向寺。二千餘人を率して。本芳嶺を執切たり。和田山の覚寺。石田の西光寺。二千餘人。燈山ハ出張ハ。杉浦壹岐。二千餘人。今庄にハ守護代たる下妻筑後法橋の起恵寺。荒河の奥行寺。四千餘騎。府中ハ城にハ。三宅権之丞。一千餘人。中の河内ハ七里三河守。八百餘騎。河野の城ハ若林長門。子息新五郎。安井右衛門尉。稲村治右衛門。二千餘。杉津にハ大塩の圓光寺。坂井郡書山村右近。五十ケ井瀬右衛門。後これハ一揆野武士も混して。寄人首頭坂江中務丞。京忠。神波七兵衛。三國柔女。加賀にて。其勢約合四千餘人。後ハ大切の敵ハ。ありとく。命を縣く相守れり。然ハ織田家の大軍。同しく八月十三日。敦賀境ハ着陣ハ。大將信長ハ郡を

る。氏蕃宗右衛門が館へ入市あるべ。備勢は敷賀に在到つて。江州坂津仮
滅まで速くと陣除もあるべきに。十二万餘の大軍なれば殺氣
凛々と沖頭まで猛威。天魔も拉んで。勢ひ。恢々くぞ見へ渡りける。這
胸柴田勝家はいづまでありとも一揆衆の。後ろ方へ向ふんと蹴蹴と親ひ
誠る石に。坂津にて大切の要害なれとく。敵にも多勢を揃へたまへ
を。羽柴秀吉ちや既ふ。地向ふべく寄せ来る。勝家聞てこの攻口を。
筑前守に奪はれまじと強く是を取望しけり。信長是を聞しめ。
坂津には大敵なれを。秀吉既ふ望をなり。依て羽柴と共勢にて。攻ら
る為にはなり。立ひ々々。勝家慎で奉聞を。多寡の知れる房を
案。幾万凝守いとも。那辺の事なるべき。小隊一隊の勢をもりけく。
攻陥さんこと。軍令を立て指ふべくれを。万石小隊一隊の勢へ。令属

らるべきなるべしと。朝を決して。柴田方秀吉侍より進出。柴田方秀
の勇猛へ。今更論ずる不なり。秀吉一隊をもりけく足ぬ為なれど。遠城の
落去際どりては自軍の備勢。故国へ。引入さる事なりがたし。坂津河
野の両城を。頼ふ落陥なさしめば。本芽枠伏すべの防禦へ。攻撃ぞ
して落去さべし。若又坂津の攻口に。陣陣なりてある。脇へ。諸城防禦の
准備整ひ。容易に落去なるがたし。是も一隊の兵士をのを。戦労なさ
せなるべしより。加勢をもりけく速ふ。攻陥もこを簡要なるべ。理を既ぬ
まども更に用なべ。元敵城を攻るの通へ。多勢なりとく一同ふ提蒐る
べき事なるべ。小勢なりとも心合べ。切陣陣ことなるべ。城てや一族
五千ばり。是小勢といふ為なりがたし。一刻攻ふへ加勢も無益と。頻ふ望を
なるふより。信長是非なるべ。柴田一隊に。坂津の撃兵を任せまへ。秀吉


月ふ乘じて
秀吉河野の
城に
推進
る

大ふ喜撓そ。當日に枚津へ推進る。これふ從ふ門こハ。柴田宮内少輔。同伊賀守。同豊物。佐久間玄蕃。柴田源左衛門。徳山五兵衛。枚沼彦四郎。毛受清助。寺こ久ハ。同淀ハ。中村与左衛門。津軍郎。安井左近。俄こる拒強の逆兵。峯。其勢ふ有餘人。旋風の像く撃爽る。然るふ當天ハ朝より。大雨頻に降出て。暮ふかゝるひハ。河こ大ふ水增り。漲り蒼る者ゝ。備前羽柴秀吉ハ。枚津の攻に城。柴田ふ奪ゝ是。河野ゝ新城ふ向さんとするゝ信長へ言状せ〜ゝ。爰速不至ふ任せゝ。汝も一隊の勢のゝにく。向へつゝやと言ゝ。然バ河野攻ハ。自勢のゝにくも足ぬべゝれど。亜級他面攻蒐らん。ハ。彼よろ〜〜いまゞ。諸將のうちを一面峯。同律命せつけらるゝ〜ゝ。頼ひふ伝せく。明者日向守光秀。稲葉伊豫入道。同嬬子右京亮。山崎源左衛門。俄を羽柴筑前ふ



酌らも。十四日ハ枚津ふ過ゝ。数百艘の船を推起。敦賀の背海を渡渉に。晝のうちハ大風ふ吹く。往来雑元るゝしかども。夜の須ゝ天晴渡ゝ。時てや十三日の夜のことゝ。これを月蛟こと海波ゝ怒〜て。金を湧らゝが像くゝ。不見ハ晝ゝ明ゝれバ。兵士俄いゝでか撓まざらん。赤雲岡めくころかひに。河野の浦ふ撑着ゝ。然ども十四日ハ日終まで風烈〜かりゝれを。敵兵大ふ周彩〜けるゝ。進兵ハ雑ふく陸ふ逃下。新城當ゝ推進ゝ

秀吉謀陥河野・越陥枚津　屬諸城落没

虎翼と持ゝといへども。天ふよるゝ偉ふかいゝ。いそか龍ふ蹟よ在ゝんや。然バ羽柴筑前ハ。惟任光秀を通ゝ教ゝ〜く。河野の新城ふ推進ゝ遠城の守護人ハ。若林長門ゝ親房。嬬子新五郎親須。軍場功者の勇士ゝれを。防禦の准備おゝ〜ゝ。守門を堅めく相須ゝ。筑前ゝ秀吉

羽柴筑前守謀をめぐらす河野の城を攻陥す

南无不可思議光如来

ハむとの謀計を元秀伝ふ諜〻合せ。又猜心ある。加藤福島序相。姫
尾。津須賀親子。脇坂伊ふも係議を教つこれ彼情地ふ埋伏させ。備又
弟小一郎。中村孫助。長井又右衛。青木勘兵衛。伊ふ二百餘人の兵士彼嫌
いづれも郷民の折扨ふく。紙旗幟を翻させ。彼よく謀合さく遠ふ遠
ゆ来らしむ。羽柴惟任稲葉。山侍。一隊となりて二子徐彷河野の新城
に籠ると推進。城と鳴り号鼓を放蒐。隊伍を礼して単騎急に攻蒐るの
威を示に。侍設たる長門ちもとしも動せば兵士彼懸ま。矢地彼落せ
く陣戦に。これふりて進兵ハ奴意と。号鼓の音喊せ声のこ。山海ふ响
くなりて勢威をゆて。城近くハ進附に。防禦の矢石を怖ろ慈る
て。若林新五郎。安井右衛つ尉ハ。傑氣の壮士なりけるを。進兵の隊伍の
礼れたる彼見く。撃て畿人と彼こなると。長門守制し止め。堅固ふ防



禦ふしなる由を。進兵いく〻。攻種こ〻宣彼あ〻て。猶豫のなり。
城より異の方ふ面まく。南云ふ平思議光如来と書たる紙の旗幟
彼指揚く。佛歌の織田を殿捉きやと。金聲くによたりく。兵二を二ふ
掛起しハ。織田勢大ふ騒噪ぎ。いふく隊伍を礼〻なるふを。城中これ
彼見るなりも。又手ハ郷民門徒の衆。報恩のためふ今遠城。後援を
みしとかれえなり。遠方なりも撃ま費く。力彼勢せて防ぐんと。新五郎
親次を親と〻。安井右衛つ尉。猶村治左夫。そのかり端雄の兵士衆城ア
彼開ひて突費けきを。長門ちも一撥の後援を衆の將法とかりひ〻ハ。
新五郎彼殿せ〻と同く〻城を折て費。進兵の魁兵ハ撃て蒐る羽柴。
惟任。稲葉。山侍。ま〻〻怖惟ひく。一遮もせば敗走に。彷ふ衆たる城兵
衆。門徒一撥と一隊ふなり。十町ふなり延蒐けるが。親房決と猶意。長

逆ハ爰の種因あり。と自軍を割て退去んと指揮を作ふる耳なり。
一炮響渡るとひらく。左右の伏兵蔓起。怒潮の勢を逆ふ像く。喚叫
で接戦る。その正斜に。加藤。福島。片桐。脇坂。藤堂。堀尾。万夫不當の
剛兵士。當るにまるせく。斬死捌伏。後又羅刹の横怒戦ふ。まくてく際ふ
一揆を。紅蓮の焔く血ふたあくり。城兵大ふ慌忙を。城ふ際で退逃を戦将
集。惟任。橋業が門。一隊ふ分りて盛逆。崩山沸海のさ如戦頭。城兵
戦中に推捉捌。刺を刺。こを攻着る。若林父子安井俊も。死力戦奮て
防戦ひ。固を戦脱んと搦らみども。自軍とふりひ。後援の兵ある門徒
の一揆まで駆とる。翻て突起る中者。親房再び驚顧ふ。備ハ郷
民俗も爰ん。栖家戦駆く面備や。怒罵つる戦所。寄兵の郷
民等に。俺们をりの郷民と。おりひるこて愚ふ色。織田家の天兵

を知らざるかと呼とり起く使て逃れた。今ハのがるく遁ふと。若林父
子。安井俊まで。こる孔軍に殿死。こ。明智秀右続進んぐ。直地ふ
新城へ推進る。城中に殘る兵卒ハ若林が戦死と聞るも。進兵の
いまぐ来ふさ沢ふ。諸戦遁れく敗走る。これにりて秀右ハ若林
戦殺殿步誠。その数かよそ三百餘級。活捉五百有餘人信長の本陣へ
傳遣る。其身ハ直ふ自勢戦華し。枚津口ふ赴沢る。惟任。福島
山傷。俄ハ木芽嶺神伏へ推進る。秀右ハ既ふ自軍の奇兵一揆と
ありて敗を敗さ。首尾ら〻勝利を得たりし。級の如く秀長俄に
加後。福島。根坂。堀尾の四勇士戦増加へく。その勢五百有餘人。ふ百
姓に扮せ。郷民一揆の体ふりてふ。通戦轉ゞて枚津口の背門の
方へ當向つ。大将羽柴秀右ハ。殿る一千七百兵士戦華し。柴田勝家の隊

豊臣記四編巻之六
堀景忠
圓光寺より
背ひく
柴田の陣へ
参る


豊臣記四編巻之六

へ行くる。然りとふ修理之進彼家ハ。十四日の黄昏より。松津の城ふ向ひくるゞ。不知案内の城攻戦。夜分ハ又〻と老業安頻に諫めける。により。名誉せんと軍議を定め。暁る戦後くありくるゞ。這一城ハ紙家の。喉咽とゝ絶不ふれど。大垣の園光寺。房主ふれども軍慮に賢く。剣や勇猛ありけゝ。軍配をるゞく指揮戦ゐ。這城中ふ凝ちし武士ふ。掘江中勢巫京忠といふハ。朝倉の勇士なり。義京を恨ゝ謀叛して。遂ふ加州へ退出され。然して這城へ加ちし。近須弟光寺と不快たるゆゑ。嘉ふ縋つゝく伝長へ降参せ。戦通ゝたり。大垣これを聞に驚知し。城中に置バ又かりゆんと城外ふ柵を搖さゝ。京忠ゆゝびふ随従せる。神波七兵衛。三園京女に。前面ゝ柵戦ちるゝゝ。京忠備いと園光寺ゞ。驚せゝ。ゆゑ戦見ゝく執て。出地に

柴田ゞ陣ふおもむき。信長へ降参ゆゝ。ゝるふゞ待家これを斜隊と。ゆゝ十五日ハ未明より。息をも絶せゝ攻たりしゆゞも。名に負大垣ゝ園光寺。諸隊にきびゝく指揮ゆゝ。炮矢を発せこと両霰す分の陣隊もゆゝせざれを。城江。柴田後。孫長ふおかゝど。給くゝなくて。霰雨がゆゞ城を覗で動つくり。法ゝ和へ羽柴秀吉。一ふ除待にく独籠り。柴田勝家に対面ゝて。河野後城の車戦つけ。惟任。稲葉。森人。本芳。拝伏へ向ふくるゞ。君命にゝりてふ居。當城攻の加勢たるゝ。命属られるふゝり。向ふたる車五ふゝる。君の陣為ゆゑをゝり。小居頼てゝり。ふ舟もゞく進後ゝたゝ。背門の方に推渚り厳ゝく攻る拝をゆゝん。ゝ。然ゝれゞ城兵大まハ。背門の方へまゝるゞし。其附面門を列ゝく攻ゆゞ。ゝゆゝゞ一時ふ破るゞしと。京忠ふ伝家諸心ゝて。這義に同ゝるゞよ

つ。秀吉彼び自勢伐華て。肖門の方伐攻記る。頼て羽柴が計設け
し。一揆寄扮の道会寄。九字の名号を記せし旗伐。函魁に立て五百
餘人肖門進兵のうしろより。瘢を常たる狂猪のごく。おりても眄
らを突、蒐るふ。羽柴の兵士猛紀。躍くにありて崩るる伐。一揆お扮の
兵士軍。進兵を左右へ追散し。肖門の風関ふ進を待。これい今左る
る下妻法楊の御特により。門徒の兵寄。當城のか勢に来るいよ
と。呼えるうちに又後より。進兵返して推捏稠る伐。一揆ふ弓たい把
く返し。戦ふ伐見さ城中にも。遊隊を出る坂井圖書。佐くぐ思
慮をめぐらしふ。郷民寄ふ相遠ふけ出を。風関推関て寄けいにで
羽柴秀吉寄ふ悦び。又手こそ謀略當りたを。快攻記よと千餘人
の勇兵城を出くり号統をつるべうみ。軍騁急に推捏け出を。城中ふい

の変事ふ恐怖し。赤顧西倒をる兵士伐。片端より砕て旋転。なか
ふも加藤虎之助。激蕃一跳をるよと見えし。肖門の守將坂井孝書
を。唯一鎗ふ掛殺し。その圖ふ乗さ南西ふ赤かめきさんで血戦し
けれも城兵寄ふ之聊ふ。逆流る而見ふ。樹系の霜風ふ靡る倫く
枯草の消火に焼るく倫し。面門の方ふもこれ伐所。猪家猪勢を烈
まして怒伐もはげせび攻を。大將圓光寺遠隊にありてさびしく
拒抗在るところに。肖門忽地騒動して歌会城中に投たりしかば系光
寺大ふ驚き懐忙なる伐見て。又手ふ城中美心に寄りたや系投と
呼えりて。依久間玄蕃。柴田伊賀守。後射をども突ども弾とせび
塀ふ把着紅揚。一番猪ふとみりけ。乳投さく彼方を又を城中にハ
えや秀吉ふ又逆ハ吹貫。瓢の忙懐凛く然と推捏て。十分に歌を

佐久間玄蕃
西門の一番
騎をて守将
圓光寺を
突殺す

逃崩し。捷結たるそのとき信長柴田が軍勢乱入して。義隆一時に接記
たる由。方便ハ城を一個も殘さず。満城の流血さながらに梓も湧ふ
ばかり。大將秀吉も一方戦欣抜遂き出んとあせりを佐久間
盛政績逐果ひ。唯一殿に斬さ為て。勝家遁脚をも既ふ。城中(投本
)。我約朝たる城攻を羽柴が新に改為され。最拵嶽秀吉ふ
むひいらふ是で其謀計戦我にいたぬと結めたる戦筋為も苑ふ
と笑ひ。條計ハ唯秘密をりて。ようとも為まで。若まあらせば彼戦
場ふ粉骨をるも。互ふ君のしあるるの戦。足下にも何を我ふも
あを。速く歓城を隔をこそ。是誠信の忠義為れ。中ふも足下の名
士達脅力戦場して西門を彼。城將圓光寺を殿まで由為當城
頓に為去せり。是金足下れ戦功ある戦。その功を幸ちんとて謀

略しのとあがさるくふ。草に征伐の事戦のを。簡要としたるれ
を。新意にりみふる。且又當城為云のふ戦。諸方の一撰密に紛せん
しふ。焼紀むつと京しるにぞ。嫉妬の柴田も秀吉が辞讓の親ふ
堪入く。暮びいるをいふ何ふく。別地羽柴が若るに信せ。備勢ふ令して
城にふ。大戦敗させく焼紀られば。柴に遠を為諸方の歓兵。枝津
為城の大の農に驚紀。過半ハ城を南遁て。四方八隅ハ紋を。蠻
る巡流一個もふ。然かどふ惟任日向守。稲葉伊勢入道。山崎源左左
清つ俗ハ。河野を出て驚地ふ絶。本芽。大打ハ推進せく。猛威たるふ
たで盛ふり。備も大打の城中にハ。和田の本覚寺。石田の西光寺。三ふ
人にく凝ちるるが。河堅の新城為云と所。情さふ。防我の進彼の
ふたるかどさへふ。で枝津にの大の農をく。方便ハいるで博為

汎。慌忙き進出る彼。日向守一徹傷ふ条ゞて攻起く。當城ちの後起て。高城を新こうめ。直地ふ錯伏へ推進たり。遠にい枚浦壹岐守二千餘騎にく宰城せ〜が。河野枚浦の蔵ふ驚汎。進条のいまゞ到らぬ陸に。城を弁てゞ逃失る。惟任稲葉傷力彼号せゞ。二の城を陥しゝれば。勢威所を破が傷く。府中彼當く進發に。柴田羽柴も枚浦に寄り。直地に府中へ推通るふ。遠道繰い閑とと〜て。欲一人もあらざれば車ふく府中へ着陣ふ。惟任稲葉傷と合陣ふ。龍門寺の城を攻起る。遠にい之宅権之丞小勢ふゞ〜も多彼備ち。進条の大軍彼ふ汎ろけく。暫く防戦せ〜ゝとも。進兵い名に常織田家の名士勝驕たる八千餘騎。万虎頭く山を崩し。千龍叫ぐ海を巻。いさかひ烈もあれど。弟でゞ宰城諸ふゞき進条一閑に騎投るゐ名。之宅も汎軍に戦死せゞ。織田家の諸將悦騒ち。使士彼馳て遠邸を馳参の沖陣へ報へるふゞ。信長遠ゞふく歓悦〜ひ。十万餘騎ふ德勢彼率倶〜閑〜く十七日に府中へ着陣〜。龍門寺の城へ沖入ゆり沖指揮きび〜く徇出〜く。石山一揆を悪く打破〜とあり。彼羽柴秀吉練言き〜く。沖憤い理ふゞ〜。歓徒い房主郷民等義百万人数〜たりとも。云益の事にいさん。石山門徒のある事い當國たゞりふいらきび。六十餘州にきびこりて宗旨ゝあふん身命を惜まぬ族ふるりの彼。郷民ふりと悔りゆふ。當國の門徒ゞ謀〜たりとも是九牛ゞ一毛にく。本願寺宗の滅亡ふもゞ〜ゞ。此事諸國へ聞えあゞ。同宗の族部く恨を恨きまゞ〜。笑をあゞふる量ゞ〜ゞ謀る。加州へ一揆の根ふれゞ。當國の崇彼きび〜く謀さゞ。加州の門徒るゐの

身の適をぬかと案知す。心底合せく防戦を企し。然る胸八今迄に加州
浅野弾正の事かくし。惟當国の一揆衆の逃ることのみりくさ。老人女児
を助者しるひ。歌詠だうを深しまつ。加州へ逃行事も。父母妻子の
情ふかされ。遠ふ厚援の心底生じて。加州征伐の一動と命ゝ。是ぞ一仁
大敬を。捨ぐべき計策あり。怖くべき賢慮をめぐされと深めるべ。信長
卒預寺伐惜まるく事。骨髄に徹しのふ。羽柴が諫言ありといく
ども。更にこれ伐謀ひ。さて。斬る亂世伐敬さんこと。行の用捨ある
べ。仁も情も東西にする。向後の見懲目當次第慶にいさべし。用捨
ハ都さ不忠あり。と憤怒えげ〳〵。沙指揮あるこれによりて秀吉も若び深む
ること絶さて。密に奚して指揮にぞ属る

凶徒悉滅令誅系貶柴田屬其国政事

高祖三章の法あり。大赦これに過たるハあり。因ゝ百年の天下伐れ
ぬ。然る小信長命令をるべく。誅系の国ハ一向門徒を信仰ともふ
一個も誅さて。慶敬せよとの指揮ふ隨ひ。諸将数方に分れて西方ハ
誅智山城左原清の色まで八原田伯中吉。不破河内守。佐久間甚九郎
安藤伊賀守。並岡兵庫助源二方。徐騎ふく攻著れた。中街道ハ柴田
勝家。羽柴秀吉。惟任光秀。丹羽長秀。稲葉一徹。滝川伯。二方又ゝまま
つ足羽の城を攻陥し。それより九頭龍。紅掲衆田長清。金津までも
一揆の郷民ハ斬弃にして。五二五三に推通る。まゝ大野郡宅食之保河
内の造八系田又左衛門。佐ゝ内義助。滝川左近将監。武田宗右衛門。二方
徐人滝陣として八。金森又兵衛八原義正。帝伯一方又千。乾合十万有徐
人四方にひかきて推極く。城塞堡伐攻陥し。一揆衆の家ゝを。焼き

く。老幼男女の差別なく。誠に家と見てやまに目當次第に掩殺す
し。山林幽谷窟隙木陰。躲漏ふことなく。食意く穿鑿出して五十
三十宿く傳連るし。或ハ撻殺し。或ハ燒殺し。礫こうして壓死かどに
道路ハ髑髏埋りて。多くハ亡もつえぶうり。そのかう寺院房舎民
家ハ。高家農宅のごとくなく。窟の底を排ふが如く。投も棄もひして
滅亡しなる。これを見聞する人ハ欲も自軍も恐怖しなり十日よ
り廿日まで。その際ひろう一旬のうち。殺害の賊數ハ。宗徒の房を
七百餘級。一揆郷民一万三千有餘級。そのかう斬弃る老幼男女に
いたりてハ。幾千万とも數へつくし。信長此体を御覧おり。愉快氣
に候悦しなひ。同じく廿八日。一揆若安養寺一本陣に移され。猶も
指揮して先陣に進めらる由。榮田勝家惟任。稲葉戸次。長岡佐



渡地ふ発て金屋細呂木より。加州の境ふ乱入し。結城泥沼。森勘左衛
て。こまくを自軍ハ助地とし。猶攻入らんと進ぶらる。羽柴秀吉殿
を尋して。衆軍を制し止れども。衆將の心區くなれば。ひとハ指揮
ふ應じ。進退さべしと。光秀をりて御本陣へ進退の去ハ何ふハしむ。
月向守ハ花が如く。一揆若安養寺御陣ふ詰参し。進退の理を言状して。
這遺ハまず御帰陣ありて。然るべしと。まうしふぞ。信長這義ふ同ぶまひ。
御還軍ハ。ひとに定めらる。然らバ加賀の國境ふ要害の地ハ撰ふべし
と。加州のうち。津波。大聖寺。城墨ハ結び戸次右近を大將として。
佐々権左衛門。泥沼中務丞。偽孫右衛門ふ命屬
らる。これふよりて光秀ハ。暇び加州へ取く返し。諸將を命して信長
の。誠意ハ演く大聖寺に。戸次右近を留置。各く越前ふ帰陣る

し。一宗若を相集る。然るに若の安養寺ハ。門徒一揆の寺なり
とて。伽藍残惜く焼拂ひ。九月三日ハの庄。足羽山ハ御陣を
移らせ。遠地ハ遠く當國の政事等一〻命令さるゝ。柳瀬の砦刀
ハ。北陸道の總冠にして。大切の地なるとて。柴田勝家に賜安れ。ハ
國の藩鎮に補任せらる。其中執賀九一郡ハ。武義惣右衛門に賜り。大
野郡ハ三分一を。原長四郎に賜ふ。その三分二ハ金森五郎八ハ
揚屋とて。これハ柴田の助とせらる。備又府中の城ハ十万石の地を
添て。前田又左衛門佐と内義勝ハ不破彦三に賜揚屋ハ是ハ府中
の三人衆とし。柴田ハ国遥ハ相副らる。北の庄の要崖に若城を
結ぐ。これハ五位しめ。紙前ハ国ハいとハおよそ〻ハ七万の總藏
を。柴田に命ぜられしハ。孫家の威勢諸人ハ近寄しハ驕に成田

殿の殿脇たる。隨一の臣とぞ見えたり〻る。其外當國の御政事
残る方〻〻命令され。同ドく九月廿三日。ハの荘を御発ハ
廿六日の申刻。濃州彼阜へ御帰城ハ〻〻。

繪本豊臣勲功記四編卷之六終